

秋田大学附属図書館長
教育文化学部欧米文化講座
立花 希一

「1872年12月3日」が何の日かを知っているひとはおそらくあまりいないだろう。イギリスのジョージ・スミス（1840-1876年）が、聖書考古学協会での論文を読み上げた日である。大英博物館アッシリア学部門の助手をしていたスミスは、数多くの粘土板の中からアッシリア語で書かれた「大洪水の物語」を発見し、それに関する論文を発表したのだ。この洪水物語を含む作品は『ギルガメシュ叙事詩』（他にもシュメール語版、アッカド語版、古バビロニア語版なども見つっている）として出版されている（矢島文夫訳、ちくま学芸文庫）。ギルガメシュは、シュメール、ウルク第一王朝の統治者であった（前2600年頃）。

「洪水物語」は、『ギルガメシュ叙事詩』第十一の書板にあるが、そこからいわゆる『旧約聖書』と酷似している箇所の一節を紹介しよう。『ギルガメシュ叙事詩』では「私〔ウトナピシュティム〕は鳩を解き放してやった。鳩は立ち去ったが、舞いもどって来た。休み場所が見あたらないので、帰って来た」とあるが、『旧約聖書』では「ノアは鳩を彼のもとから放して、—中略— 鳩は止まる所が見つからなかったので、箱船のノアのもとに帰って来た」となっている。カトリックの元聖職者で、アッシリア学の第一人者だったジャン・ボテロ（1914-2007年）は、聖書作者がこの書板を横に置いて、ノアの洪水物語を執筆したとまで述べている。

『旧約聖書』は、西欧では19世紀半ばまで世界最古の書物だとみなされ、それに疑問を抱くものはまったくと言っていいほど誰もいなかった。全知全能の神の言葉が書かれた作品だと信じていたひとびとにとってはまさにそうであった。ところが、スミスの発見およびそれに続く数十年にわたる多くの学者たちによる研究の結果、『旧約聖書』が世界最古の書物ではないことが判明した。

真理探究には、何ものをも絶対視しない相対化の視点が不可欠である。しかしながら、もし第十一の書板が発見されていなかったら、事態はどうなっていただろうか。確たる歴史的証拠がないままに、現在でも、『旧約聖書』が世界最古の書物としてひとびとに信じられ続けていたかもしれない。

『ギルガメシュ叙事詩』は、アッシリアのアッシュールバニパル王（前669-627年）が首都ニネヴェに造らせた「王宮図書館」跡から発見された。このような図書館は、メソポタミア地方にはそれ以前からいくつも存在し、アッシュールバニパル王は、いろいろな場所からの図書の収集も命じていた。因みに、日本最古の図書館は、物部氏の石上宅嗣が奈良時代末期に造った「芸亭（うんてい）」だそうだ。

現在では、「古代オリエントなくして、古代イスラエルの世界も古代ギリシャの世界も存在しえなかった」というのが常識になっているが、この知識が得られただけに留まらず、連綿と続く知的伝統が成立したのも、文字の発明と文字を用いて書かれるようになった書物の存在、さらには書物の収集・保存・提供の場である図書館の存在がおおいに関わっているのだ。